# 村上市立瀬波小学校 校歌 と その意味

吉田 敏夫 作詞
小出 浩平 作曲

**一　気比(けい)の宮居(みやい)の　千木(ちぎ)高く　　瀬波(せば)の郡(こおり)と　　呼ばわれし**
**古き名残(なご)りを　今に秘め　　越路(こしじ)の涯(はて)の　　うまし郷(さと)**

「気比の宮居」とは，現在の西奈弥神社のことである。明治初期までは，気比大明神，或いは気比大神宮等と呼ばれていた。気比神宮の大祭が９月４日と定められているため，現在の瀬波大祭も９月４日に行われている。
「千木」とは，知木・鎮木とも書く。社殿の上の交差している木のことである。
「瀬波」と書いて「せば」と読むのは，瀬波郷土史に次のようにある。「伝承によると，神様が船出してどこぞによい土地はないものかと探し求めていた時，たまたま瀬波の沖にさしかかり，あそこによい土地がある，そこに行こうと仰せられたところ，背後から心地よい風が吹いて，この土地に着いた。その際に，よき“背の波かな”と仰せられたので，この土地を瀬波と呼ぶようになった。」という記述がある。

**二　四つの眺めの　美(うる)わしく　　海の生産(なりわい)　　山の幸**
**港入江は　　百船(ももふね)の　　ゆきかい繁き　櫂(かい)の歌**

瀬波町明細町（享保３年：１７１８年）に，「瀬波の川港は，昔からの船津であり，川の状態にもよるが，時には千石船まで出入りできる。」とあり，有数な港として栄えていたことが伺える。そういう意味で，「百船」という歌詞であろう。

**三　三面川(みおもてがわ)に　　影うつす　　螺峰(らほう)の姿　　さみどりの**
**松原続き　　温泉(ゆ)の煙　　わが学舎(まなびや)の　　窓にみる**

「螺」とは，「たにし，さざえ等，螺旋状の殻を持つ貝類の総称」である。下渡山（標高２３７．８ｍ）が螺旋状に成り立っていることから，「螺峰の姿」とは，下渡山のことである。
「松原」とは，瀬波町と瀬波温泉との間に浜山という丘陵地帯があり，そこに松林があったことを示している。風砂の害を防ぐ重要な役割をもっていたが，塩害で枯れる木も多く，創立１３０周年を機に，卒業学年が記念植樹を実施している。

**四　朔風(さくふう)荒れて　　波うてど　　ゆるがぬ巌(いわ)の　　心持て**
**やがて世のため　里のため　　雄々(おお)しくたたん　いざ我等**

「朔風」とは，北風の意。日本海に面し，北風をまともに受ける瀬波らしい言葉である。

※　この意味に照らして，校歌を現代風に訳すと，裏面のようになる。

# 村上市立瀬波小学校 校歌 現代風訳

一　気比(けい)の宮居(みやい)の　千木(ちぎ)高く　　瀬波(せぼ)の郡(こおり)と　　呼ばわれし
古き名残(なご)りを　今に秘め　　越路(こしじ)の涯(はて)の　　うまし郷(さと)

西奈弥神社の，千木が高く見える
この一帯は，以前，瀬波郡と呼ばれた所である。
そんな古い歴史を，今もひそかに残し，
越後の国の北端の，満ち足りた里だ。

二　四つの眺めの　美(うる)わしく　　海の生産(なりわい)　　山の幸
港入江は　　百船(ももふね)の　　ゆきかい繁き　櫂(かい)の歌

瀬波の浜からの四方の眺めは，大変素晴らしい。
海からの恵みは豊富で，山の幸も多い。
河口からの瀬波港は，たくさんの船の
行き来がしきりで絶え間がなく，船の櫂が歌を歌っているようだ。

三　三面川(みおもてがわ)に　　影うつす　　螺峰(らほう)の姿　　さみどりの
松原続き　　温泉(ゆ)の煙　　わが学舎(まなびや)の　　窓にみる

三面川に，その山影を写している。
下渡山の，緑色が目に沁みる。
瀬波松原，瀬波温泉まで続いている様は
わが学舎の，窓から見える。

四　朔風(さくふう)荒れて　　波うてど　　ゆるがぬ巌(いわ)の　　心持て
やがて世のため　里のため　　雄々(おお)しくたたん　いざ我等

北風が荒れて吹き，波がいくらうねっていても
びくともしない岩のような，心を持とう。
そしてやがて世のため，人のためになるよう
さぁ，私たちは勇ましく立ち上がろう

現在の瀬波温泉海水浴場
（夏になると大勢の観光客で賑わう。右後方に見える山が下渡山。）